

## 地域作りにマニュアルはないー「自分再発見」の大切さー

2008年が明けた。昨年は食物、年金、教育等々で何かと不安を感じる年だったのではないだろうか。一方、東北の農山村に住んでいる筆者にとっては、そうした世相の不安感を目の当たりにしつつ、農山村（里地里山）の地に根ざした多様で不動の魅力をつくづく感じる年でもあった。

山形県内陸北部に位置する戸沢村の奥深い山村・角川の里に住んで5年目を迎える。そんな筆者は昨年、角川の里のみならず、さまざまな農山村と付き合う機会を持つことができた。

隣の庄内地方の海辺の集落、島の漁村、山村、山形市などの都市近郊の農村などの山形県内はもとより、佐渡島の漁村や農村、遠くは九州・水俣など南日本の農山村とも交流を持たせていただいた。いろいろな里地里山を見て交流を重ねる中で改めて思うのは、大切なのは足元を見つめ直すことだというシンプルなことである。

昨年、NPO法人里の自然文化共育研究所を立ち上げた。最近、角川の里の活動は山形県最上地方と庄内地方を中心にした様々な農山漁村との交流連携活動が盛んになってきたこと、そして行政、大学、企業、NPO等との多主体連携の事業が増えてきている。そこで地域や行政の枠組みを越えた活動のより一層の展開を目指して作られたのがこの組織である。これまで角川という山村でのみ活動していた住民団体・角川里の自然環境学校を母体としつつ、そこから独立して、農山村の地域作りをより幅広くネットワークしていこうという新たな試みでもある。

複数地域をまたいだ広域的な活動の中で改めて気づかされるのは、各地の農山漁村の驚くほどの多様性である。海、山、川、都市近郊など、いろいろな地域のそれぞれにさまざまな暮らしの知恵や工夫、多様な時間があり、そしてそれら生活世界を基礎づける考え方がある。それはその土地ならではのものであり、まさに今その土地に住んでいる人々が担っているものなのだ。逆に言えば、その土地でしか通用しないものであり、その土地に住んでいる人にしかできないものなのだ。ということは、あらゆる人々や地域に共通する地域作りマニュアルなど存在しないということの意味する。

最近、あらゆる農山村の地域作りに普遍的に通用する理論と方法を提示し、次世代の農山村像を提言するように行政や大学から要求されることが多くなっている。ある地方大学の学者はそれが「科学」が求め、行わなければならないところなのだという。しかし、農山漁村の豊穡な多様性を目の前にする時、こうした要求に対して筆者などは根本的なところで違和感を持ってしまう。

昨年12月に水俣を訪れた。そこでの地元学の提唱者、吉本哲郎氏の一喝は「『地域作り』ではない、『〇〇作り』（〇〇には固有の地名が入る）ということが大切ばい」だった。同じく水俣の富吉正一郎氏は「過疎化少子化だからなんとかしなきゃ、と言って、今地域にいない若者や子どものことを語ってもしょうがないとよ。まずそこに今住んでいるじいちゃ

ん、ばあちゃんが楽しく生きがいをもって暮らせる地域にしていくことが重要ばい。そうすれば若者たちだって引き寄せられて来るんじゃないかね」と言う。

再び吉本氏がこう語った。「現場に課題はある。でもその解決策もやっぱり現場にあるとよ。だからその土地の人々から学び、その人々から潜在能力を引き出していく姿勢が大切。誰かに教えるのでも誰かから教わるのでもない。一緒に肩を並べて歩きながら、自分で自分のことを再発見し、自分で育てていくことが大切ばい」。改めて「地元学ぶ地元学」の大切さを痛感した旅だった。そう、答えは地域の数だけあるのだ。

新しい年、東北の農山漁村はさまざまな主体や地域との交流や連携が一層活性化されそうな気配だ。その時、中心軸として地域に根ざした視点を改めて大切にしたい。